

結果ばかり気にする子

上越教育大学助教授

なかやま かんじろう
中山勘次郎

「この問題は、とてもむずかしそうに見えるけれど、ある規則に気がつけば、あなたたちでも簡単に解けます。さあ、どんな規則があるのか、話し合ってみよう」

教師はときどき、クイズのようにちょっとひねった、それでいておもしろい問題を子どもたちにつけて、考えさせることがある。それは、新しい学習への導入であったり、学習した内容の応用であったり、あるいはたんに気分転換であったりと目的はさまざまだが、いずれ

も「まじめな学校の勉強」という枠から飛び出して、子どもたちに興味をもたせ、楽しみながら問題解決に取り組めるような場面を、意図的に授業に取り入れているのである。

教師にしてみれば、興味のある問題を自由にあれこれ考える中で、これまで学習した知識や考え方を活性化させ、思考のウォーミングアップを図ったり、学習内容のいつそうの定着をめざそうというのがねらいである。したがって、ここでは、どれだけ早く解けるかは重要ではな

い。おもしろがって、どんどんいろいろな考え方・解き方を試してくれば、それでいいのである。

ところが、そうした教師のねらいは、子どもの発した一言で、あっさり打ち砕かれることがある。それは、こんな発言によってである。

「先生、これ成績に入るの？」

それまで熱心に問題に取り組んでいた他の子どもたちも、その一言でいっせいに手を止める。うっかり正直に「成績とは関係ないよ」などと答えてしまうと、クラス中の熱気が

いっきに冷めてしまうことがあるそう
うだ。子どもたちをしばらくつけてい
る成績の「魔力」を、つくづく思い
知らされる瞬間である。

話は変わって、明日から冬休みと
いう教室の中でのこと。子どもたち
は、担任教師からわたされた通知表
をながめては一喜一憂している。通
知表といえば、従来の五段階評価か
ら様式が一新され、今は観点別評価
の◎や○がずらりと並ぶ形式に変わ
りつつある。たんに成績が上がった
下がったで騒ぐのではなく、どこが
よかったか悪かったかを具体的にふ
りかえることができるように、とい
うのが観点別評価導入のねらいの一
つである。そのために教師も、子ど
もたちの学習成果をできるだけいろ
いろな角度から評価しようと、努力
と工夫を重ねている。

ところが、せっかく苦勞して作成

した通知表なのに、それを受けとっ
た子どもたちの間で交わされるの
は、○の数が一学期から何個増えた
か減ったかという話ばかり。評価の
観点など読んでもいない子が大半
で、これでは五段階評価のころとち
つとも変わらない、と教師は嘆く。

成績にとらわれる子どもたち

学校での学習が、多かれ少なかれ
成績という評価基準、言いかえれ
ば、「できる・できない」の基準に
しばられていることは否定できな
い。だからこそ教師は、ときにはそ
うした基準から離れて、考えるおも
しろさ、学ぶ楽しさを子どもたちに
存分に味わわせようと、授業に工夫
を凝らしているし、通知表の評価方
法においても、全般的な「できる・
できない」ではなく、多様な基準を
採用するようになってきているので

ある。

ところが、なかには「できる・で
きない」基準に強い執着を示す子ど
もたちがいる。どんな活動をしてい
ても、つねに成績が気になってしか
たがなく、とくに点数や順位などの
数字に過敏に反応する。自分の学習
活動のできばえを、すぐに点数で評
価してもらいたがったり、日常のド
リルや小テストでさえ、ちょっと悪
い点数が続くとパニックに陥ったり
する。また、人によっては、まわり
の人たちとくらべて自分の方が優れ
ていると思いたいために、むやみに
他人をけなしたり、負けている相手
を攻撃したり、という行動も見られ
る。成績という評価にすっかりとら
われている彼らの様子は、まるで、
点数や順位という数字でしか自己像
を描けないかのようにさえ見える。

こうした傾向は、子どもたちにか

ぎったことではない。たとえば昨今、大学生や社会人の一部に資格取得熱が高まっている。なかには「資格マニア」とか「資格ゲッター」などと呼ばれ、何十種類もの資格をもっている人もいるくらいだ。資格は、たしかに就職に有利にはたらくという面もあるが、最初は就職のためだったとしても、いつのまにか、とりやすそうな資格があるととらずにはいられなくなる人もいるようである。「資格が一つ増えるごとに安心感が生まれる」のだそうだ。TVゲームの主人公が、経験値があるごとにさまざまな能力を身につけていくように(TVゲームの世界は、まさに経験でも能力でも命でも、何でも数字で表してしまう世界だ!)、彼らは取得した資格の数によって、自分に能力があることを確認し、安心感を得ているのかもしれない。

成績への執着と自己評価

私たちが主体的に何らかの活動に取り組むとき、そこにはいつも、自分にはどのくらいの能力があるかを知りたい、という心理的メカニズムがはたらいている。そのため私たちは、能力の高さを確認できるような活動や状況へと強く引きつけられていく。何度もやったことのある活動は退屈にみえ、経験したことのない新しい活動へと興味が向きがちなのとも、あるレベルで確実にできるようになつたら、次はもう一段階高いレベルに挑戦したくなることも、このメカニズムによるものである。活動したあとにその結果を知りたいと思うのも、同じメカニズムにもとづいている。それは、自分の能力を確認する直接の機会だからである。

ただし、行動の結果は点数や順位

だけではない。今までできなかったことが上手にできるようになった、目わからなかったことがわかった、目標にしていたレベルまで、がんばって到達できた、気を抜かず最後まで力を出しきったなど、行動そのものに対する評価も重要な結果の一つであり、達成感・充実感を生み出す源泉となる。しかし、残念ながらこれらの結果は、どれも本人の心の中だけで起こるものであり、いささか明快さに欠ける。その点、点数や順位という結果はみんなに見え、意味もわかりやすい。

自己像がまだ安定的に確立されていない児童期は、自己の能力を確かめたい、行動の結果を知りたいという欲求がとくに強くはたらく時期である。なかでも、自己評価が低かったり不安定な子どもの場合は、有能感を高めたいというよりは、いつも

「失敗するのではないか」「自分には能力がないのではないか」と、有能感低下への不安にさらされているため、たえず行動の結果をチェックすることで、とりあえずの安心感を得ようとする傾向が強い。

こうした子どもたちにとって、行動そのものによって生じた達成感や充実感といったあいまいな結果は、有能さをたしかめる情報としては役に立ちにくい。彼らにとって頼れるのは、もっとわかりやすい指標、すなわち、数字で明確に表される成績や順位なのである。このように考えると、成績への執着の強さは、少なくとも部分的には、自己評価の低さ・不安定さを反映していると考えることができよう。

成績へのこだわりを解くために

では、そうした子どもたちに対し

て、私たちおとなはどのようなにかかわってあげようか。

一つには、彼らの自己評価の低さ・不安定さに焦点を当て、肯定的な自己評価の発達を促していくことである。とりわけ、成績に依存しない別の評価の視点を提示し、彼らの中に形成していく必要がある。そのためには、先ほど役に立っていないと指摘した、行動自体にともなう達成感・充実感を補強し、より力強く有効な情報として機能するよう、支援していくことが考えられる。

たとえば、今までできていなかったことが、不完全ながら少しはできるようになったとか、結果にはつながらなかったが、あきらめずに努力を続けているといった行動は、目に見える結果と結びついていないことであっても、子ども自身では、なかなか達成感・充実感が得られない。そ

こで、「よくなってきているよ。その調子で」「がんばっているね。いいぞ」というように、子どもたちの取り組みをおとなが積極的にとりあげ、認めてあげるのである。

このとき重要なのは、どこがどう評価できるのかを具体的に指摘することである。ただ甘い言葉をかけただけでは、明確な結果を求める子どもたちには受け入れられず、自己評価も高まらない。「ここがよくなくてきている」「この考え方は正しいから、このまま続けよう」と、具体的にはつきりと指摘してはじめて、それらは子どもたちに実感をもって受け入れられ、達成感や充実感を生み出すことができるのである。

このように、取り組む態度や向上の程度など、子どもたちの行動自体に肯定的な評価を集中させ、達成感や充実感を体験させていくことは、

子どもたちに、点数や順位とは異なる新しい評価の視点を提示することにつながるであろう。そこで彼らが自己評価を高められれば、子どもたちは、結果だけでなく活動過程や行動そのものにも、少しずつ目を向けるようになると考えられる。

第二に、私たちおとなは、自身自身が点数や順位という評価基準にとらわれていないかどうかを、もう一度見直す必要がある。

そもそも、点数や順位に大きな意味があることを教えているのはおとなであって、たとえば赤ちゃんにとっては、おっぱいの飲み方が八〇点だろうと、ハイハイがだれよりも早かろうと、何の意味もない。おとなたちが成績や順位に一喜一憂するのを見て、子どもたちもその意味を学習するのである。つまり、子どもたちの成績への態度は、周囲のおとな

たちの態度から大きな影響を受けている。おとなが成績を神経質に問題にすれば、子どもたちもしだいに成績に執着するようになるのである。

困ったことに、おとなにとっても点数や順位といった数字はインパクトが強い。三〇点しかとれなかったテスト答案を見せられれば、無条件に怒りたくもなるし、体育で一位になったと言われれば、夕食を少々豪華にしたくもなる。

しかし、ちょっとここで考えてみよう。点数や順位だけで子どもを評価していないだろうか。百点とったら好きなものを買ってあげるとか、私の子どもならそんな悪い点をとるはずがないとか、競争では必ず勝たなきゃダメとか、結果の重要性を強調しすぎているだろうか。直接には言わなくても、そんな視線をたえず子どもに投げかけていないだろうか。

か。これらは、成績に対してプレッシャーをかけ、結果への過度のこだわりを形成する原因となっているかもしれない。

点数や順位には、本当はもっといろいろな情報が詰まっている。たとえば、以前とくらべてどの程度伸びたか、計算問題が苦手なのか応用問題が苦手なのか、ケアレスミスなのか概念そのものがわかっていないのか。それらは、次に子どもたちが何を勉強したらいいかを示す、重要な情報なのである。たんに「八〇点とれてよかった」ではなく、こんなふうにおとなたちが成績情報を利用してみせることで、子どもたちも、結果をもっと柔軟にとらえることができるようになるであろう。

そのためには、まず私たちおとなが、成績への見方を変えていく必要があるのではないだろうか。